

堂後遺跡現地説明会

1. 堂後遺跡の位置と環境

河沼郡湯川村大字勝常字堂後に所在し、阿賀川の自然堤防上に立地しています。会津盆地のほぼ中央部にあって、北西に飯豊山麓、北東から東にかけて雄国山麓、磐梯山など主要な山々を見渡せる位置にあります。

2. 調査にいたる経緯

昨年度（2009）の村営墓地開発事業にかかる発掘調査において、古代～中世の溝跡が発見されました（第1図参照）。この溝跡は西側を南北に縦断し、北西でほぼ直角に折れ曲がり東西に延びる状況が確認されました。溝跡はさらに東に向かってのびていく状況がうかがえました。溝跡の位置が応永5（1398）年に再建の記載がある勝常寺薬師堂（別名：会津中央薬師堂、国の重要文化財に指定）の北西隅にあって、薬師堂を大きく囲むように確認されていること、溝跡内の遺物が14世紀頃の中世陶器が出土していることから、おそらく再建された前後の薬師堂に関する施設である可能性が高まりました。



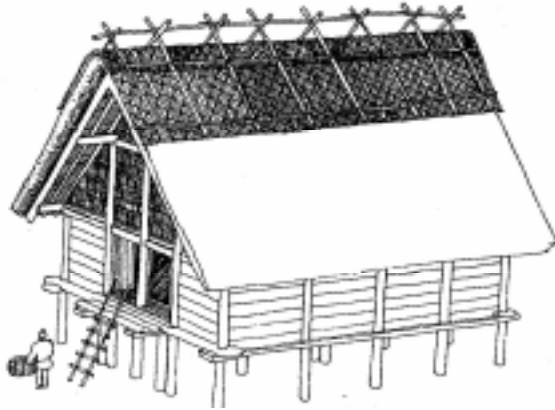
3. 調査の成果

昨年度の結果を受けて、今年度（2010）は溝跡がどこまで伸びていくか、その範囲を確認するため、発掘調査を行いました。範囲確認調査に先立ち、4月に地域活性化施設（現：湯川たから館）の駐車場敷設に際して行った調査では、平安時代頃の遺構や遺物（土師器・須恵器）中世の青磁の破片などが発見されました。この結果は薬師堂の東側において遺跡が良好な状態で残っていることを示しており、中世の溝跡よりも古い時代にさかのぼる遺構や遺物が確認される可能性が考えられます。

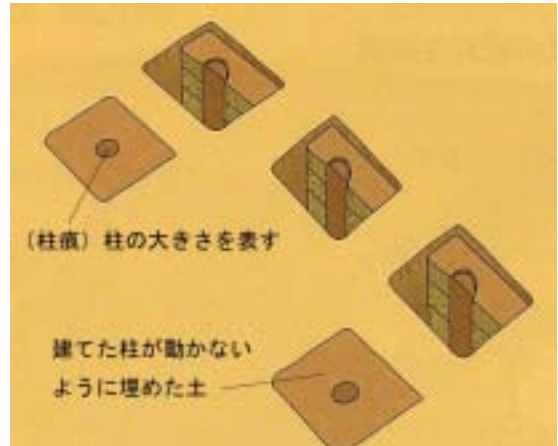
5月半ばより開始した範囲確認調査では、4つのトレンチを設定して調査しました。昨年度の溝跡の東西の延長上に設定したトレンチからは、東西に延びる溝跡が確認されました。東西に延びる溝跡はさらに東に向かって続いています。その他に東西の溝跡に対して、南北方向に斜めに延びる溝跡が2本確認されています。

また、薬師堂の東側に設定したトレンチ（3T：第1図参照）では、平安時代頃の建物跡が2～5棟、溝跡が4条、方形の竪穴状遺構1軒、その他、土坑や多数の小穴がありました。

建物跡は掘立^{ほったてばしら}柱という方法で建てられています。柱を設置するため、地面に穴を掘って柱を立て、その上に床や屋根を築き上げていきます。今回見つかった建物跡は、大きさが分かる2棟で測ると、約6mと8mぐらいの大きさの建物と考えられます。確認された柱の大きさは直径20～30cmが多いですが、中には40cmになるものもあります。



掘立柱建物跡復元想像図
「古代の村」古代日本を発掘するより転載



柱穴の様子
はじめての発掘調査 - さあ、考古学へ挑戦だ - より転載・一部加筆

4. 発見された遺構の性格と時代背景

(掘立柱建物跡群) 薬師堂の東側で確認された掘立柱建物跡群は、現在の薬師堂より東へ約25°斜めに傾いていて、その建物跡と平行している溝跡も確認されました(第1図6T)。柱穴の中からは、平安時代の前半頃の土師器や須恵器が出土しており、ちょうど徳一上人が勝常寺を建てた頃もしくは少し後になると考えられます。もしかしたら、現在の薬師堂は室町時代に再建され、ほぼ真北に設置されていますから、最初の頃の勝常寺はすこし東を向いていたのかもしれないね。

(溝跡) 中世と考えられる、薬師堂を囲むような溝跡が存在した頃の会津地方は、南北朝の争乱に揺れる中央の情勢とは別に、戦国期において会津の守護となる^{あしな}蘆名氏が次第に台頭しつつありました。勢力を強める蘆名氏と他の領主たちとの間に各地で戦乱が起こり、特に勝常寺の薬師堂が再建された頃は、北田氏(現在の湯川村北田に居を構えた)^{きただ}や新宮氏(現在の喜多方市慶徳に居を構えた)^{しんくう}との間にいつ戦が起きるか、一触即発^{いっしょくそくはつ}の状態でした。このような背景で溝跡はお寺を守る上で何らかの役割を果たしたものと思われる。のちに北田氏も新宮氏も蘆名氏に滅ぼされていきます。

5. 今後の課題

昨年度より行われた発掘調査によって、勝常寺周辺のことを少しずつわかってきました。他では類をみない美しい薬師如来や日光・月光菩薩、その他貴重な仏像・絵画・仏具など多くの文化財が安置・収蔵されているお寺は全国にもそうはありません。このような埋蔵文化財の調査を行うことは、寺の由来や歴史を解明する上で重要になっていきます。今後、村の“たから”として大事にしていきたいと思います！！